

関西現代俳句協会 会報

No. 33

2004. 10. 10

二〇〇四年度「総会」特別講演

俳句の現代性

講演・伊丹三樹彦 顧問



皆さん今日は。大変立派な会場で講演させて戴き、これも長生きの御蔭だなど思っています。

《南から北へ》

昨年の現代俳句協会の総会は、南の都ホテルでありましたが、今年は、北の大阪国際会議場に移って参りました。

のですね。

鈴木六林男さんは、南海沿線の泉大津にいらっしやって、また、当時の同人雑誌の仲間の多くも、南の方に住んでいらしたという関係もあったかと思うんですが、それが、今日は、北の「国際会議場」へ移って参りました。

私は、月間三十回もの俳句講座を指導しておりますが、例えば朝日新聞の「朝日カルチャー」、毎日新聞の「毎日カルチャー」、梅田駅前第四ビル内には「NHKカルチャー」、新産経ビルの「JTB俳句講座」、阪急ターミナルビルの「産経学園」などがあります。考えて見れば、この大阪の北に、私自身のカルチャーを五箇所も持っているわけです。頻々と北大阪に来ているわけです。

《一人の時間》

講義が終わりますと、教室の方々には申し訳ないのですが、単独者にしてもらっています。一人の時間を持ちたいのです。

「創作者」とか「表現者」というのは、一人の時間を持たない俳句も作れないし、写真も撮れないのではないかと思っています。朝日新聞社から、この川筋を上つて来ますと、「蕪村の里」毛間の開門に出ます。撮影行です。逆に下つて参りますと、ロイヤルホテルとか、この国際会議場に、さらに川口に出ます。昔、川口には、居留地がありまして、その名残の素敵な教会が今も残っております。

大川から分かれて堂島川と土佐堀川に挟まれたのが、この中之島であります。一人歩きから俳句が生まれ、写真が撮れるのです。

《現代俳句の名前の由来》

「現代俳句協会」の「現代俳句」の名前に拘つて考えてみますと、私の知る限りでは、最初「現代俳句」を雑誌の名前にしたのは、石田波郷であります。石田波郷が「現代俳句」という名の総合誌を戦後いち早く編集発行致しました。志摩芳次郎が波郷とコンビを組んでおりました。なしろ、波郷の編集ですから、今のように商業主義の総合誌ではありません。全く純粹な総合誌であり、しかも、高級な総合誌を目指しておりました。

「現代俳句」はいうならば、石田波郷と西東三鬼の提携というか握手が編集方針だったように記憶しております。思えば、現代俳句協会の先駆的な雑誌でありました。波郷

は優れた俳人であり、優れた編集者でありました。「現代俳句」誌上では、野見山朱鳥が有名になりましたが、大阪では火渡周平が発見されました。私はその頃、伊丹で古書の「伊丹文庫」を開いてましたが、石田波郷から原稿依頼があれば俳句など何も知らない家主の小母さんなんかには、「波郷から原稿依頼がきたよ」と見て貰つたりしました。そんな時代がありました。

《第二芸術論》

当時（昭和二十一年）桑原武夫が総合雑誌「世界」で俳句「第二芸術論」を発表しました。本人もあんなに大騒ぎになるとは思わなかつたらしいです。「世界」の編集部もそうでしょうけど、桑原武夫の俳句「第二芸術論」は社会現象でしたね。私は、当時二十歳代で生涯俳句に懸けようと思つていた矢先でしたので、桑原武夫にあんなふうな俳句をこてんぱんにやられましたので、三日三晩眠れないぐらい悔しい思いを致しました。

「現代俳句」から、何か書けと言われましたので『桑原武夫への問わず語り』というようなタイトルでエッセイを書かせてもらったこともありませう。「問わず語り」は永井荷風の小説の題名のもじりでした。

《川筋俳句》

川筋と俳句というものを合わせて考えて見ます。私は何

万と俳句を作っているのですが、私がそれ程気に入っていない俳句が世間で認められることがあります。皆さんも実作者でありますから、経験がおありとおもいますが、例えば

大阪やラムネ立飲む橋の上

伊丹三樹彦

戦後すぐの旧作であります。俳句で「大阪」という地名を詠みこんだのは初めてなのですが、東京辺りで、伊丹三樹彦と言えば、「大阪やラムネ立飲む橋の上」の作者というんです。私はそれ以外に俳句を作っていないのかと言いたいのですが、まあ、ある意味で受けたんですね。この橋はどここの橋かと問われるのですが、阪急塚口駅から梅田駅の間、途中、新淀川を越しますけど、その上で、旗を靡かせて、ラムネを売っている。それを詠ったまでのことなのです。当時の大阪では珍しくもない風景です。

山口誓子を思い出しますと、

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

山口 誓子

私は、当時二十代でしたからひどく惹かれました。句集名は『炎昼』でした。出版社は三省堂でした（昭和13年）。その頃は、次の誓子句集はとか、波郷は、草田男はと、句集出版を待ち望んでました。へこんどなあ、誓子さん『炎昼』という句集出すんやで、しかも、三省堂からやで、誓

子ぐらいになつたら三省堂から句集出せるんやでVなどと楠本憲吉らと話したりしたものです。

日野草城も大阪の川筋にある「大阪海上火災」の保険会社に勤めておりました。渡辺橋の近くです。一、二回しか訪ねていませんが、朝日ビルのフルーツパーラーなどで恋人達が待ち合わせをしたり、当時の中之島OLの人間風景を詠ったりしていました。会社が終わって御堂筋に出ますと、こんな風景に出あいます。

新鮮な夕刊を買う風の中

日野 草城

文字通り新鮮な句柄ですね。こういう気分は、今でも大阪の御堂筋で味わえるんじゃないでしょうか。

《大阪ガスビル物語》

御堂筋には有名な「大阪ガスビル」があります。大阪の名建築の一つであります。ちょうどその頃、私は、兵庫県立工業学校の建築科にいました。卒業に際し、社会見学の一環として、神戸や大阪の建物の見学旅行をしたことがあります。その一つが、大阪ガスビルであり、他には北浜の証券取引所や馬場町のNHKビルです。

そのガスビルの中に水谷碎壺さんが重役で勤めてました。水谷碎壺さんは戦前の新興俳句『旗艦』の編集発行人でありました。水谷さんは重役ですから、編集とか発行には時

間があまり割けなかった。そこで、俳人の井上草加江、長田喜代治を自分の会社に雇って『旗艦』の編集発行に専従させていた。私もガスピルの水谷さんを訪ねていました。鈴木六林男さんと初めて会ったのもこのガスピルであったと思います。鈴木さんも、戦後は『旗艦』の流れを汲んだ『太陽系』へ移っていましたが、やはり、水谷さんを訪ねていたのだと思います。兵隊から帰ったばかりで、詰襟の学生服だったと思います。

日野草城もガスピルへ来られてました。

先日『ガスピル物語』という本が出まして、私も一篇書いているんです。ガスピルの食堂なんかは、当時大変贅沢な気分が致しました。また、大阪海上火災の関係会社で損保協会という保険会社の厚生施設が北浜にあり、そこで『太陽系』の発行所句会が開かれていました。この句会では私と火渡周平が司会を担当してました。

先日宇多喜代子さんに会いました折、私の「りんくうNHKカルチャー」に、火渡さんの縁故の方が見えてますよVと告げました。火渡さんは一時期の問題作家ですから、彼女に火渡さんのことを書いて欲しいと頼みました。今、コンタクトを取っているそうです。

セレベスに女捨て来し畳かな

火渡 周平

流石、宇多さんですね。すぐこの句が出てきました。宇多さんは『旗艦』とか『太陽系』には直接の関わりは無いのですが、新興俳句の研究の中で、この句に出あったそうです。セレベスに従軍していた人、あるいは、派遣されていた人が現地妻を作っていた。その妻を捨てて彼はいま日本に帰って来ているという。壮大な物語が一句から読取れるではないですか。凄いなと思った次第です。今一つ

石の上石の上馬歩きおり

火渡 周平

という俳句もあります。これ以上単純化出来ないような一句です。何しろ、変わってましたから、私もいくつか覚えてしまったわけです。彼は、その一連の俳句に「花鳥昇天」というタイトルをつけていました。「花よ、鳥よ、昇天してしまえ」などつけてしまったのでしょうけど。波郷は面白い俳句を作る人を見つけるとすぐ起用したのです。

この会場には前にも来たことがあるのですが、ビルの中にたくさんの桶が植えてある。建築も変わってきましたね。空間を大切にし、その空間にはたくさんの桶が植えてある。緑の空間を作っているんですね。茶屋町の方（ドラマシティー）にはビルの空間に椰子の木が生えています。

《水の都 大阪》

大阪というのは、水の都と言われ、八百八橋といわれま

した。橋の句を思い出してみますと

大阪の橋に小さき手をおきぬ

小田 武雄

小田武雄は『天の川』出身です。青玄にも参加してくれましたが、後に小説を書いて「オール読物」の新人賞を受けました。また、ラジオの脚本なども書いていました。松山から大阪に来た彼は、孤独感あるいは疎外感を味わったのではないのでしょうか。

△大阪の橋に小さき手▽つまり数ある大阪の橋の上にこんな小さい手をおいている。卑小の存在感を覚えたのではないのでしょうか。生活を詠つていながら叙情的な俳句を詠んでいました。

小田武雄にも非常に憧れていました。彼は伊予の人ですが、同じく伊予では富沢赤黄男が出ております。やはり私は、赤黄男にも惹かれていました。

《現代俳句との関わり・少年時代》

十三歳から俳句を始めたと紹介されましたが、雑誌に投稿したのは十七歳のときからです。長谷川かな女の『水明』に投稿していました。その時は、当然有季定型の俳句です。初めは三木から汽車通学をしていましたが、進学準備の為にいうことで神戸に下宿させてもらいました。そこが、久岡杏南子という水明の幹部同人の家でした。先生について大

人の俳句会に出て、大人とつきあうのが嬉しくて仕方が無い。どこに行っても最年少です。「岩田笛秋」と名乗ってました。未だに「笛秋」と呼んでくれる人がいます。沢井我来さんです。沢井我来（曲水同人）さんは兵庫県俳句作家協会の会長をしておりますが、当時は神戸三越の前で「都屋」という万年筆屋をしておりました。また、元町には上田富丈（天の川同人）さんの店がありました。判子屋さんでした。私は学校帰りに沢井我来さんや上田富丈さんという俳人の顔を見る為に、店の前を行ったり来たり。学生時代の思い出の一つであります。

《現代俳句との関わり・現在》

詩を書いて 一生綿々 蝸牛

伊丹三樹彦

私は今八十四歳。俳歴七十年。俳句を七十年も厭くことなく続けた男ということはまぎれもない事実ですから、もし自慢出来ることがあるとすればこのことでしょうか。この句は私の代表句に入れて戴いてもいいのではないのでしょうか。先日、中永公子の台本による三樹彦の映像評伝が「伊丹三樹彦 HAIKU OVER The SEA」と題して、七十五分間のビデオ一巻を撮り下ろしてもらいました。《現代俳句協会の誕生》

現代俳句協会は石田波郷編集の雑誌以後に生まれました。

俳句で生活をしている専門俳人の組織で中々入会出来ませんでした。当初四、五十人の集まりでした。俳人は著作権を無視され蔑ろにされている状態である。例えば、歳時記や出版物に引用されても、何の問い合わせもこない。これに対して俳人の生活擁護を第一義にして生まれたと思います。それが、こんなに永く続きますと段々と内容も変化してまいります。只今は一人に近い会員で、あらゆる人に門戸を開いている。そういう機関になっております。

《現代俳句協会と俳人協会》

「現代俳句協会」から割って出たのは「俳人協会」でした。何故離れて行ったか。現代俳句協会賞が、ある時期前衛俳人に偏った為に「伝統俳句」陣営の人々が我慢出来なくなり「現代俳句協会」を出て「俳人協会」を作ったのです。その直前、赤尾兜子さんが現代俳句協会賞を受賞したのです。石川桂郎さんが一票差で落選したのです。で、「俳人協会」は純然たる伝統俳句の組織です。

その当時の「俳人協会」の幹部に安住敦や、石田波郷、中村草田男、大野林火等の俳人が集まっていた。たまたま、私の古い俳句仲間である小寺正三に安住敦から誘いがきた。

△伊丹さん、安住さんから誘いがきたか△と。△来ないなあ△ということで、小寺正三が安住敦にねじ込んだので

すね。三樹彦と僕は仲間なのに、何故、伊丹君の所には勧誘状が来ないのかと。

安住敦は困って△伊丹君は無季俳句を作るだろう△と。△個人的には好きなので、伊丹君も呼びたいのだが……△と。

お解りのように、「現代俳句協会」は無季俳句も結構、口語俳句も、自由律俳句も、伝統俳句は勿論言うまでもなく、およそ俳句を愛するあらゆるジャンルの人々に門戸を開いているのです。

対立協会である「俳人協会」は無季俳句は入会お断りです。

《伝統俳句協会》

今ひとつ、あとから「日本伝統俳句協会」が出来ましたが、これはもつと右よりの「ホトトギス」を中心にした団体であります。

大きな団体は、現在、「現代俳句協会」と「俳人協会」と「日本伝統俳句協会」の三つであります。それぞれ協会の主旨はちがいます。私のように無季俳句、口語俳句、海外俳句を作る者は「現代俳句協会」しか拠りどころがないわけです。永い俳句生活ですから、何人かの協会の会長に仕えてきました。それは皆新興俳句系の会長でした。これまでの三谷昭、横山白虹、金子兜太さんなどです。現在は「四

季」の松澤昭さんですが、この辺も少し事情が変わって参りました。

《俳句の現代性》

俳句の現代性とは何かと申しますと「方法論」ですね。「方法論」として、有季定型の他に、当然無季俳句とか口語俳句が上がってくるのですね。レジメ代わりに、三樹彦の「自筆青玄前記抄」というものを事務局に用意してもらいました。青玄前記というのは、実は日野草城が『青玄』を創刊したときに『青玄』の表紙に次のような類の前記をはじめ込んでありました。

「俳句は東洋の真珠である」

(草城前記)

草城さんが大変気に入っておられた言葉です。俳句は東洋で生まれたパールの輝きのような詩である。この前記はいろんなところに引用されています。今や俳句は東洋といわず西洋といわず世界的にも受け入れられています。ならばもはや、

「俳句は世界の真珠である」というふうに言えるのではないでしようか。

またの章には、

俳句は「諸人巨喜の詩」であるという一章があります。

これは、花鳥諷詠の詩にたいして「諸人明け暮れの詩」い

わゆる市民生活の詩であることを謳歌されたわけです。

生活俳句、人生俳句に俳句のテーマを求められた草城は虚子門下から出ておりますが、その師から除名された理由はいろいろあります。解りやすく言えば、無季俳句を作り出した草城は、もはや、ハホトトギスの同人に非ずVということだと思えます。

草城の運動は人生とか生活を詠う場合には季語や季題を超えざるを得ないということで「無季俳句要綱」の一文も残しています。

草城先生が亡くなられたあと、二代目の私がこの前記を延々と続けているのです。

「その作者が消えても俳句は残る」

(三樹彦前記)

最新の「青玄」六月号には右の前記を書いております。俳句をされている方は、この世に何か残して置きたいという希望を持っておられるのではないでしようか。そのようなことで俳句を選んだわけです。

自己表現の文芸として、俳句のような短い形式は他には無いのでは。例えば、私が亡くなっても私の俳句は残ります。消そうと思っても消すことは出来ませんね。また、その人が俳句を止めても怠っても、その方が、かつて素晴らしい俳句を作っておられたら、その俳句は残るでしよう。

「俳句は垂直の抒情詩である」

(三樹彦前記)

俳句・短歌・詩はすべて抒情詩と言えるのですが、その中で俳句の特徴は何かと申しますと、俳句は、垂直性にあるのではないか。つまり、俳句は縦の一行詩である。詩は多行形式であり、短歌は二行形式である。「分ち書き」はいつも話題になります。縦の「分ち書き」と横の「分ち書き」があります。高柳重信は横の「分ち書き」をしています。私は縦の「分ち書き」です。そこが違うのですが、何故か、横の「分ち書き」は余り批判を受けないで、縦の「分ち書き」の三樹彦が専ら批判を受けております。

「俳句は抒情詩の中の抒情詩である」

(三樹彦前記)

これも皆様方に受け取って欲しい前記の一つです。抒情詩ですから、感情を述べる詩というのは、他の詩と同じなのですが、俳句は感情を述べるのに、物に即して述べる。つまり、自分の感情を物に即して即物的に表現するのが、俳句の大きな特徴です。

かつて、『青玄』に大中青塔子という論客が徳山におりました。東京には早く世に出た楠本憲吉がいた。当時私は三十代の主宰者でしたが、わが『青玄』には楠本憲吉とか大中青塔子という素晴らしい仲間が東西にいたのです。青

塔子はこの「青玄前記」を自分の主宰誌にも使いました。

《写俳運動》

話は変わりますが、私は今、写真もやっています。実は、私のルーツに詩人の村野四郎がいるんです。昔は俳句より詩の本をよく読んでいて村野四郎の『体操詩集』が出たとき大変衝撃を受けました。『体操詩集』って変わったタイトルですが、スポーツを扱った詩集なんですね。水泳の飛び込みとか、陸上の槍投げとか、障害物競走とか、そんなアスリートを詠み込んだ詩集なのです。当時、詩壇でも画期的な評判を呼びました。村野四郎の『体操詩集』には、写真がイラスト代わりに使われていた。その写真を誰が撮ったかという、ヒットラーの恋人と言われたレニ・リーフェンシュタールのようです。

オリンピック・ベルリン大会のときに彼女が撮った写真が気に入って『体操詩集』のなかで使った。私も、「俳句と写真」をドッキングさせて、「写俳運動」をやっておりますが、村野四郎が『体操詩集』のなかで、「スポーツ写真と詩」の取り合わせということで、先にやっているのではないかと、後から気がついた次第です。

では、どうしてスポーツ写真のような動きの速いものが撮れるようになったか。それはライカが出来たからです。それまでは、弁当箱のような大きなカメラでした。こんな

物ではオリンピックのような動きの速いスポーツ写真は撮りません。ライカはスナップ用の有力な武器なのです。写真には五十歳から本気になりました。今はライカ型のカメラやニコンの一眼レフなどを使っています。

神戸に竹中郁という詩人がいました。竹中郁は小磯良平と同じ神戸二中（旧制）の出身です。実は、竹中郁も絵描きになりたかったのですが同級生の小磯良平の絵を見てこれは張り合っても敵わないと、画家を諦めて詩人になった。小磯良平と竹中郁は巴里へ仲良く留学しました。

竹中郁は巴里の詩人たちの影響を受けて、帰国後、シネマのコマ繋ぎのような「シネポエム」と言うものを書きました。所謂、シネマのシナリオのようなものです。私は昭和十年代、神戸で俳句をしましたので、神戸の詩人竹中郁や東京の詩人の村野四郎などの影響を受けたのだと思います。

《神戸句会》

その頃、神戸は中山手の三菱クラブで『旗艦』といわず、「天の川」といわず、『京大俳句』『火星』などの新興俳句系の結社仲間が総合句会をやっていました。そこへ出向いて、有名な平畑静塔、波止影夫、仁智栄坊ら、京大俳句系の方とか、また、上田富文、竹中露水（天の川）ら有名な俳人らも出向いて来てました。加えて、直接の先輩、神生彩史、笠原静堂、棟上碧想子、三保嶋磁らも出向いて来て

ました。日野草城さんは、会社が忙しく、年に一、二回位。そこで日野草城さんに初対面しました。私はワクワクドキドキしました。生え抜きの新興俳句の人と話をしますとあつという間に時間が過ぎました。

「若者には若者の 老人には老人の俳句がある」

（三樹彦前記）

これが一番受けました。若い人の立場も老人の立場も考えて作った前記です。お前は何故そんなに元気かとよく問われるのですが、思えば自分の好きなことだけを貫いてきた。俳句が好きで、俳句をやるのなら、月謝は払ってやらないと言われたり、校門のところに父親が引き戻しに来たこともありました。いろんなことが有りましたが好きなことだから耐えられました。

《防老三法なり》

自分で自分を褒めたい事は、何を言われても辛抱できます。そして、七十年間好きな俳句を続けてきたことです。

△俳句で頭を使っています▽△字を書いて手を使っています▽△写真を撮って足を使っています▽。

ヘッドワーク。ハンドワーク。フットワーク。これ「防老三法」なり。有難うございました。

〈記録・桑田和子〉

ご挨拶に代えて

関西現代俳句協会

会長 山本千之



ご案内のように、
関西現代俳句協会は去る六月五日の総会において発足した。現代俳句協会関西地区会議と

いう関西に歴史を刻んだ名称から、明るくすつきり時代の趨勢を反映したものに代わったのである。歴代の議長ならびにスタッフの地区会議での労苦に深謝するとともに、新しい呼称が一日も早く定着するように祈っている。

本年は和知喜八氏の現代俳句大賞受賞を喜びながら、組織を見直し在来イベントの他に、地区幹事の変更、吟行会の開催、関西のホームページ、名簿の制作などを加えた。事業の一部、琵琶湖クルーズは既に成功裡に実施された。改称にふさわしい協会にするためにいま全力を注いでいるところである。幸いスタッフにも恵まれ企画が次々と生まれている。これら相互の関わりの中で新しい道を歩かなくてはと思っっている。会員諸氏に一層のご協力をお願いしてご挨拶に代えたい。

関西現代俳句協会事業報告

平成15年7月～16年6月

忘年会&句集祭

昨年来、徐々にはあるが会員中心にシフトしつつあるとの評を得ており皆様のご協力を深謝している。年末の関西でのイベント「03年度忘年会&第28回句集祭」(通称、忘年会&句集祭)

は、12月5日(金)天王寺都ホテルで開催したが、参加者は80余名であった。今年度の幹事会の主な議題は「規約」と、「会計処理に関する規約」の制定で、

いずれも可決、懸案の会名の「関西現代俳句協会」への変更も総会の議決を待つことになった。また、総会の6月への変更、ホームページの立ち上げも決定。「句集祭」の今年の出品数は、「句

会長 山本千之

集」20点「写俳集」1点、「評論・エッセイ」4点。全25点であった。懇親会では、杯を交わす古い仲間たちの輪が随所にでき、若い人も加わって和やかな会となった。乾杯の音頭は鈴木六林男先生にお願いし、二時間余を楽しく過ごした。

運営委員会・企画委員会

本会の運営の基本は、月一回の企画委員会と、運営委員会にある。今年度も、規約の改訂や「南琵琶湖クルーズ吟行」、会報や名簿の発行等につき審議した。なお、当日欠席の委員には事務局より議事録等報告をお送りした。

二〇〇四年度総会・ 幹事会・懇親会

今年度から「総会」や「忘年会&句集祭」等の会合は中之島の府立「大阪国際会議場」に移した。国際的な知名度と交通の便、清潔な雰囲気、横溢するこの場所を、会員にも味わって頂きたい。その第一回が6月5日(土)の総会だったが、参加者は80名弱であった。

幹事会は山本議長の前年度の事業報告に始まった。「一般規約」および「会計規約」の改正、「会名の変更」も異議なく決定。ついでホームページの立ち上げや吟行会、15年度会計監査結果、16年度の事業案、会計案等も了承。19日実施の「南琵琶湖クルーズ吟行」の説明もあった。

総会は吉本伊智朗議長で進行され、審議内容は幹事会の内容と同じで、それに先立って昨年度の12名の物故者への黙祷。本年度新入会44名のうち5名の出席者の紹介があった。

また本年度の「第4回現代俳句大賞」を関西の和知喜八氏が獲得された。こ

れで3年続けて関西勢が獲得したことは誠に喜ばしい。幹事会での審議事項はすべて承認され、2つの規約の発効と同時に、新会名「関西現代俳句協会」がスタートした。

今年の講演会の講師は伊丹三樹彦先生で、演題は「俳句の現代性」だ。青玄俳句会の政野かず子氏による先生の紹介のあと、登壇された先生は84才とは思えない記憶力と話術で、その矍鑠ぶりには若い会員を圧倒するものがあった。約一時間後山本新会長の謝辞で終えた。

懇親会は内部レストランに場所を移したが、市の南部一望の眺望のよさが好評。和知喜八氏による乾杯の音頭で始まり、隣接するリーガロイヤルホテルの味もまた好評で、約2時間後、立岩利夫氏の閉会の辞で締め括った。

琵琶湖クルーズ吟行

湖上吟行は、6月19日(土)琵琶湖浜大津港からスタート。当日の選者は、鈴木六林男、伊丹三樹彦、和知喜八、立岩利夫、花谷和子、石田香枝子、豊

田都峰、吉本伊智朗、山本千之それに加藤風信旗の10名の先生方。吟行は外輪船ミシガンで琵琶湖の南部を約1時間半クルーズのあと、大会会場を湖西の近江神宮勸学館に移した。参加者は75名で計150句。各選者毎に特選2句、入選8句を選ばれ、特選には協会発行の『現代俳句歳時記』一揃えが贈られて好評。午後4時すぎ散会したが、予告された大型台風の襲来になかったことが何よりも有難かった。

(尾崎 青磁)

本会顧問

和知 喜八先生が第四回

「現代俳句大賞」を受賞

されましたことを、会員

の皆様とともに心から

お慶び申し上げます。

関西現代俳句協会

会長 山本千之

新会員の一句

仕掛人いるらし全山蝉しぐれ

龍鼻 梅田 芳克

七五三芸妓さびしく振り返る

上田安太郎

翔ぶものに迫る暮色や花茨

京鹿子 佐久間多佳子

血を吸ふ蚊討つや阿修羅となり果てて

野の会 高木 秀慈

わあ涼し釈迦ににらまれ手を合わす

京都俳句 西村 最上

百日紅ひと揺れ齒科医の門ひらく

野の会 倫 アツコ

ルンペンの嘘からからと冬茜

渦 山中 西放

喰わるるを知らで美しよ月鈴児

とらいあんぐる 右川 ふみ

初蝉や恋唄めきて婆が経

海程 門脇 章子

敗戦日 リュックの底で 叩かれる

風鈴 巽 三千世

一つ家に住みて老いゆく天の川

藍 藤堂 和子

水族の集まる夜の滑り台

齒車・蠶 西平 信義

折紙の涼しき色を帆掛船

藍 頤宮 れい

赤い紙大きく飛んで二重虹

藍 平井 郁子

逝きし者みな笑顔なる広島忌

俳句人 天野 静鬼

本丸の身許たしかな著我の花

鴻の鳥 伊藤 愛子

引き際を心得ていて 夏帽子

青玄 内海 嘉治

梅雨晴間浜茶屋造りの槌の音

俳星会 大賀 税

蝸や練習曲はピアノニツシモ

藍 大津 茂子

南瓜煮る 女系家族の三世代

花野 尾畑 悦子

桐一葉落ちしばかりの飼葉桶

斧 川上より子

更衣夕べの僧の影送る

鴻の鳥 川嶋 芳重

絆生む揃ひの傘や梅雨の古都

鴻の鳥 川村ますみ

郭公の この日は声を惜しみなく

青玄 芝地三千代

白牡丹ぐらりと風をかわしけり

田村 征介

夕空へ棟上がりけり遠花火

東条句会 土肥 文子

蛩の向こうの闇の獣道

花野 西村 辰子

蟻の列遊び上手な農婦づれ

鴻の鳥 西村やす子

ひと日だけ翼の欲しき水の秋

炎環 秋尾亜矢子

万緑を鏡に入れて紅を引く

花野 宮垣ちさと

カナカナカナ 人の字一本傾いて

青玄 森本 満枝

夏の風夏の盛りに吹きにけり

らん 矢田 鏝

万灯といへど一灯づゝ灯す

渦 山崎しんべい

ホップスの闘ひに死す百日紅

草苑 山崎 茂晴

だんまりの二歳の抵抗水馬

柚木 都子

あめんぼう鯉の背を越え雲に乗る

野の会 渡辺珪永子

青葉潮とうとうとして陸を押す

実の会 岡田 路光

四次元の中を歩みて蝉しぐれ

あざみ 小坂 節子

ヨットの帆たちまち海が目醒めけり

あざみ 玉置 陽子

台風も遠慮してくれました 南琵琶湖クルーズ吟行会・開催!

二〇〇四年度、関西現代俳句協会吟行として、六月十九日(土)、南琵琶湖ミシガン・クルーズを実施。

さまざまの名所旧跡に囲まれた南琵琶湖。初夏の太陽をいっぱい浴びながら、天智帝の御代から、延暦寺、信長、光秀、秀吉、さらに近代から現代へと発達して来た華やかな商業の歴史を湖側から探り出そうというのがこの企画である。実際、参加者はその通りの光景を実感されたことがその作品から想像できた。船の中で作った俳句を、下船時に集め、近江神宮勸学館で総括句会を開催した。



記

- 日時 二〇〇四年六月十九日(土)
- 吟行 浜大津から、外輪船ミシガンに乗船、南琵琶湖周遊
- 選者 山本 千之、鈴木六林男、伊丹三樹彦、和田 悟朗、吉本伊智朗、花谷 和子

豊田 都峰、石田香枝子、立岩 利夫、加藤風信旗の諸先生の計一〇人

- 会場 近江神宮勸学館
- 参加人数 七十五名
- 賞品 優秀作品Ⅱ現代俳句歳時記(改訂・学研文庫版)

佳作賞Ⅱ近江神宮の神酒

といった内容で実施された。長い間吟行会が開催されなかったこともあり、賑やかな吟行大会の中でも、参加者は真剣に句作に取り組まれていた。ミシガン船中での懐かしいジャズ演奏、軽妙なショーの上演など、柔らかな頭を取り戻すためのひとときは、参加者に深い感銘を刻み込んだものではなかったか。ただ船の都合で、早朝からの開催になったため、参加者が少々少なかつたのが心残りである。運営にあたっては、地元の渦大津句会、無名会、青玄大津支部の皆さんのご協力を頂いたことを厚く御礼申し上げる。

次回は今回の反省材料を踏まえて、より多くの人が参加でき、より意義のある大会にしたいと考えている。

(中井不二男)

選者特選句

- 鈴木六林男 特選
夏が好き船べりに倚る危ふさも
淡水魚柱の深さに溺れたり
- 伊丹三樹彦 特選
沖の帆の散りては寄りてソーダ水
浮御堂みて遊船に紅を引く
- 和田 悟朗 特選
比良青し仇く船と遊ぶ船
比叡したたりてみやこは車輪の下
- 三田 陽子
服部 近江
金山 桜子
志村 宣子
河井 末子
加藤風信旗

花谷 和子 特選

夏が好き船べりに倚る危ふさも

浮御堂みて遊船に紅を引く

立岩 利夫 特選

梅雨晴れの比良を廻して出航す

航跡や昨日は既に遠離かり

豊田 都峰 特選

夏つばめ船の手旗と交信す

沖の帆の散りては寄りてソーダ水

石田香枝子 特選

サングラス比良も比叡も円の中

ヨットの帆三角になり線になり

吉本伊智朗 特選

鳥鳴くや近江の朝の青臭き

薫風に乗つて湖賊の舟来るか

加藤風信旗 特選

緑降る近江に時計停まりをり

復活の田螺近江は濡れてあり

山本 千之 特選

水無月の淡海殺意はありません

剃りあとのざらつきだして梅雨に入る

選者入選句

鈴木六林男 入選

でっかい蜘蛛張りついていた近江宮

船待つや煽がれてゐる青うなじ

寝冷して眼に溢れたる帆の白さ

サングラス比良も比叡も円の中

三田 陽子

志村 宣子

綿貫 伸子

石川日出子

松井 太乙

金山 桜子

和田 悟朗

花谷 清

駒沢 知子

三田 陽子

西村 操

山中 西放

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

村井 隆行

梅雨晴れの比良を廻して出航す

緑降る近江に時計停まりをり

畏しや都の跡の瓜畑

伊丹三樹彦 入選

この森の今夜はきつと青葉木末

紫蘇揉みし手を振る再会禰宜の前

夏蝶は縄文の湖めぐり来し

石垣は穴太衆積みみ蜥蜴の子

船上のジャズに湧き立つ雲の峰

船上のマリンバ揚羽蝶の併走

剃りあとのざらつきだして梅雨に入る

ゆつくりと遠嶺流れて朱夏周航

和田 悟朗 入選

迷い込む近江の神苑桜桃忌

夏蝶は縄文の湖めぐり来し

近江富士と比叡をつなぐ白帆かな

魚影なき六月の湖えり光り

梅雨晴間航跡消ゆるまで明らか

大いなる青水無月の湖国かな

ヨットにも午睡の時刻比良比叡

ヨットの帆三角になり線になり

花谷 和子 入選

今生のいま新しき水しぶき

沖の帆の散りては寄りてソーダ水

薫風やなびくもの着て甲板に

船上のジャズに湧き立つ雲の峰

紙の血飛ばしてみたし船遊び

父の日のクルーズ戦火を消しにゆく

綿貫 伸子

西村 操

川村 茂明

石田香枝子

茨木 晶子

清水 暎子

増田 耿子

萬木 和榮

服部 近江

河井 末子

村井 隆行

神崎ひでこ

吉田 彌生

増田 耿子

森 たける

大島 時子

和邇 典子

田中 正子

上森 敦代

花谷 清

石川日出子

金山 桜子

廣畑 昌子

服部 近江

吉本伊智朗

田口美喜江

少年の素足疾走湖の蒼

船上のマリンバ弾む夏の鳶

立岩 利夫 入選

薫風やなびくもの着て甲板に

畏しや都の跡の瓜畑

大いなる青水無月の湖国かな

ヨットにも午睡の時刻比良比叡

緑陰にほどよく腹も減つてをり

薫風に乗つて湖賊の舟来るか

紫陽花の自分の色を咲きにけり

剃りあとのざらつきだして梅雨に入る

豊田 都峰 入選

漏刻の声かすかなり黒揚羽

高気圧張り出しており夏燕

薫風やなびくもの着て甲板に

船上のイエスタデーワンスモア雲の峰

サングラス比良も比叡も円の中

鮎船やへの字にかかる湖の橋

雲雀より遠き青空を大津宮

梅雨晴れの比良を廻して出航す

石田香枝子 入選

遊船の飛沫は湖の百花かな

比良青しゆく船と遊ぶ船

外輪船みず巻き上げよ桜桃忌

薫風やなびくもの着て甲板に

父の日のクルーズ戦火を消しにゆく

船上のマリンバ揚羽蝶の併走

ゆつくりと遠嶺流れて朱夏周航

サングラス男お洒落のひとつとす

久保 敬子
奥本 芳枝

廣畑 昌子

川村 茂明

田中 正子

上森 敦代

中阪 賢秀

三田 陽子

笹倉 照女

村井 隆行

堺谷 真人

金山 桜子

廣畑 昌子

菱川 弘子

和田 悟朗

鈴木 紀子

堀竹 善子

綿貫 伸子

志村 宣子

河井 末子

花谷 清

廣畑 昌子

田口美喜江

河井 末子

神崎ひでこ

萬木 和楽

吉本伊智朗 入選

薫風やなびくもの着て甲板に

船遊びどこまでゆくも鳩の湖

父の日のクルーズ戦火を消しにゆく

日除けして湖の小魚小高い

梅雨晴の遺跡に丸い石ひとつ

梅雨晴れの比良を廻して出航す

みづうみを抱く暗さなし近江の夏

船待つや煽がれてゐる青うなじ

加藤風信旗 入選

遊船の定座は今日もうしろ向き

つばめ反る櫓の高さがまた好きで

水無月の淡海殺意はありません

少年の素足疾走湖の蒼

雲雀より遠き青空を大津宮

晴れました六月の湖はだぶだぶ

剃りあとのざらつきだして梅雨に入る

山本 千之 入選

この森の今夜はきつと青葉木菟

汽笛する蜃気楼みたあのあたり

夏蝶は縄文の湖めぐり来し

漏刻の初めの地なり風薫る

言霊や青葉木菟目を覚ましけり

晴れました六月の湖はだぶだぶ

時の日や捻子巻く事もなきままに

ヨットの帆直立ひとつの入水かな

廣畑 昌子

桑田 和子

田口美喜江

田中 正子

紙谷香須子

綿貫 伸子

池田 織恵

堺谷 真人

豊田 都峰

豊田 都峰

村井 隆行

久保 敬子

堀竹 善子

中阪 賢秀

村井 隆行

吉田 禰生

茨木 晶子

林 宣子

増田 耿子

上森 敦代

堀竹 善子

中阪 賢秀

百木 京子

鳥羽 夕摩

★次の規約は本年六月五日の総会で承認された。

関西現代俳句協会規約

第一章 総則・目的・事業

第一条 この会は、関西現代俳句協会といい、事務所は事務局長宅に置く。

第二条 目的および事業は現代俳句協会(以下、協会という)の規約に則つて、これを行なう。

なお、事業に関して他に関西の地域性により重要と判断されるものについては、幹事会の過半数の賛同を得て会長がこれを行なうことが出来る。

第二章 会員および役員

第三条 この会の会員に関する事項は、協会の規約によるものとする。

第四条 この会には次の役員を置く。

- 一 会長 一名
- 二 副会長 二名
- 三 幹事 三〇名以内
- 四 事務局長 一名
- 五 経理部長 一名
- 六 企画部長 一名
- 七 会長、副会長、事務局長、経理部長、企画部長は幹事に含まれる。
- 八 会計監査 二名
- 九 運営委員 若干名

第五条 第四条の役員については、幹事会において推薦し、総会において過半数の議決を得るものとする。なお、幹事は当会に所属する俳句会の主宰ならびにそれに準ずる者より会長が推薦し、幹事候補者の互選によりこれを決

め、会長が委嘱する。

第六条 役員は業務分担は、協会の業務分掌に準じて行なう。

第七条 役員は任期は三年とする。ただし再任を妨げない。

第八条 役員に関する経費および費用の弁償は別に定める。

第九条 当会の顧問は、原則として満八〇歳を超えた功労顕著な会員の中から幹事会が推薦し、会長がこれを委嘱する。

第三章 総会・幹事会・運営委員会

第十条 総会は年一回六月にこれを開催する。その他総会に関する細目は、協会の規定に準ずるものとする。

第十一条 幹事会はその必要のある時は、随時会長がこれを召集する。重要な提案事項ならびに決議事項は、次の総会にはかるものとする。

第十二条 運営委員会は会長の諮問機関として、会の運営に関し必要な事項を提起かつ審議し、その決定事項は会長より幹事会にはかるものとする。なお、運営委員は会長の定めた関西連絡網より選出された俳句会の主宰または、主宰の推薦した者により構成する。

第四章 内部組織および所管事項

第十三条 この会の会計処理は、協会の規定に準じてこれを行なうが地域性に鑑みた当会独自の処理については、別に定める「関西現代俳句協会・会計処理に関する規約」による。

第十四条 当会の事務処理は事務局長がこれを

おこなう。事務局長は会長が任免する。なお、事務局長は総会その他会合に関して必要な事務局員を、会長の了解を得て依頼することができる。

第五章 付 則

第十五条 この規約に定めのない事項は、原則として協会の定めるところに準じて行なうが、地域性を主とした事項に関しては会長がこれを定める。

第十六条 この規約は、平成十六年六月五日より発効する。

関西現代俳句協会 会計処理に関する規約

第一章 総 則

(目 的)

第一条 この規定は、関西現代俳句協会(以下「関西現代俳協」という)の会計および財務に関する基準を確立して、その処理を確実にし、協会事業の健全な執行に資する事を目的とする。

第二条 関西現代俳協の会計年度は、現代俳句協会本部の定めるところに従い、暦年(一月〜十二月)とする。

(会計区分)

第三条 関西現代俳協の会計は、次の通り区分する。

- 一 一般会計 通常業務の執行に関する収支を取り扱う会計であつて、特別会計以外のものをいう。
- 二 特別会計 限定された期間に実施するなど、通常業務以外の特別の業務の執行に関する収支を取り扱

う会計であつて、その都度、当該業務の目的に合致した名称を付するものをいう。

第四条 関西現俳協の資産は、次に掲げるものとする。

- 一 会費（本部費用を差し引いた残額・現代俳句協会年会費の二割に相当）
- 二 寄付金
- 三 事業収入および資産から生じる収入
- 四 その他の収入

第二章 勘定科目および帳簿

（勘定科目）

第五条 関西現俳協の勘定科目は、現代俳句協会の勘定科目に倣うものとする。

（帳簿の種類）

第六条 帳簿は主要簿と補助簿とする。

附 主要簿は総勘定元帳、補助簿は、現金出納勘定、銀行勘定、事業費勘定、管理費勘定など必要に応じて整備することとする。

（会計伝票）

第七条 会計伝票は、入金伝票、出金伝票、振替伝票の三種類とする。会計伝票は、原則として出納責任者が作成し、証憑書類を添付しなければならない。

（総勘定元帳）

第八条 総勘定元帳には、会計伝票による各勘定ごとの金額を転記する。

（補助簿）

第九条 補助簿には、各勘定科目の種類によつてその内容、金額を具体的に記載する。

（残高照合）

第一〇条 特別の事情がない限り、半期に一度（毎年八月）会計担当者は総勘定元帳

の各勘定科目の金額に基づき、試算表を作成、会長の了承を得るものとする。

（帳簿の更新）

第二一条 帳簿は、特に支障のない限り会計年度ごとに更新する。

（帳簿及び書類の保存期間）

第二二条 会計に関する書類の保存期間は、原則として各決算期末五年とする。

第三章 金銭会計

（金銭の範囲）

第二三条 この規定における金銭とは、現金（小切手、郵便為替証書を含む）および銀行その他の金融機関への預金をいう。

附 有価証券は金銭に準じて取り扱い、有価証券の金額はその取得価格を基準とする。

（取引銀行などの決定）

第二四条 関西現代俳句協会が取引しようとする銀行およびその他の金融機関の決定は会長の決裁を受けなければならない。

（出納管理責任者）

第二五条 出納管理責任者は会長とする。ただし、会長が指名するものに委任することができる。

（金銭出納担当者）

第二六条 金銭出納を担当するもの（経理部長）は会長の承認を受け、事務局長が指名する。

第二七条 金銭出納責任者（経理部長）は、第七条の規定に従い、会計伝票を作成するほか、金銭出納簿、各補助簿の記帳、証憑書類の保管を担当する。

附 金銭出納責任者以外の者は、原則として金銭の出納を行つてはならない。

（収 納）

（支 払）

第一八条 銀行振込、郵便為替の場合を除き、金銭を収納した時は、金銭出納担当者領収証を作成、交付する。

第一九条 金銭の支払いは金銭出納責任者の決裁した会計伝票および証憑書類により行う。

第二〇条 金銭の支払いに際しては、支払先より適正な領収証を徴収して保管しなければならない。

附 銀行振込、郵便振替による支払については、預金口座振込金受取証、郵便振替領収証をもつて、上記領収証に代えることができる。

附 領収証の徴収が困難なものについては、それに代わるもの、または出納管理責任者の確認によつて処理することができる。

（手持ち現金）

第二一条 手持ち現金は、当座の必要額を除き、遅滞なく銀行その他に預け入れなければならない。

（金銭の保管）

第二二条 金銭および金銭出納に関する書類は、常に出納管理責任者の指示に従い、オープンにできるように金銭出納責任者が保管・管理しなければならない。

（前払いおよび概算払い）

第二三条 経費の性質上、または業務運営上の必要があるときは、次のものにかぎり前払いまたは概算払いをすることができる。

- 一 加入団体会費
- 二 定期刊行物の代価
- 三 諸賃借料
- 四 委託料

前払金

五 一括材料費

- 一 旅費
- 二 会議費、行事費など出納管理責任者が必要と認めた経費

(金銭残高の照合)

第二四条

- 一 現金については、金銭出納担当者がその残高を実査し、現金勘定残高と照合する。
- 二 預金については、毎年一回決算期に、金銭出納責任者が預金先金融機関から預金残高証明書を受け取り、銀行勘定帳の当該預金残高と照合する。預金残高証明書は預金通帳を以て代えることができる。
- 三 有価証券については、半期に一度残高を実査し、その勘定残高と照合する。
- 四 銀行その他の金融機関に預託された定期預金通帳、貸付信託および金銭信託証書その他の預金証書、有価証券などの保護預かり通帳の残高については、随時、その元帳残高、銀行勘定残高との照合を行う。出納担当者は、前項の照合の結果を遅滞なく出納管理責任者に報告しなければならない。

第四章 予算および決算

(予算の作成)

第二五条 予算は、当該事業年度の事業計画に基づき、第三条の区分経理に従って作成する。

(決算整理)

第二六条 決算整理は、次のものについて行う。

- 一 未収金、仮払金その他の債権に関する整理
- 二 未払金、仮受金その他の債権に関する整理
- 三 引当勘定に関する整理
- 四 その他決算に必要な事項に関する整理

(計算書類の作成)

第二七条

- 金銭出納担当者は各事業年度終了後、速やかに次の計算書類の原案を作成し、出納管理者(会長)に提出しなければならない。
- 一 財産目録
 - 二 貸借対照表
 - 三 収支決算書
 - 四 その他の必要な付属書類
- 会長は、計算書類を監査役に提出し、監査を受けなければならない。

第五章 契約

第二八条

売買、貸借、委託、請負その他の契約責任者は会長とし、特に会長の委任した事項については、事務局長とする。

第六章 雑則

(基金の管理、運用の細則)

第二九条

基金の管理、運用の細則はこの規程のほかに会長の定める内規に従って行うものとする。

付則

- 一 この規定は、二〇〇四年の総会の承認を経て、直ちに発効するものとする。
- 二 この規定は、現代俳句協会の「会計処理に関する規定」に準拠して制定されたものであるが、地域性を主とした事項に関しては会長がこれを定める。

企画部短信

一、〇五年度吟行大会企画

二〇〇五年度・関西現俳協吟行俳句大会案を企画中です。去る六月十九日開催された「南琵琶湖クルーズ吟行」は、近江神宮を会場に七十五名の会員の皆様ご参加を得て、無事終了しました。有難うございました。この経験を生かして、次年度の吟行を検討中です。吟行会ともなれば吟行地の選定、それと会場の確保も肝心です。例えば、須磨海岸、飛鳥、和歌浦、比叡山、大阪城公園、万博記念公園、鶴見緑地等々いろいろ候補地が考えられますが、各県回り持ちの形でどこがよいか皆様のご意見をお待ちします。

二、奈良歳時記(仮題) 編纂企画

関西の各府県別に新しい郷土歳時記をまとめて上梓する企画です。平成八年頃から「渦」誌に五十二回連載された、現事務局局長尾崎青磁氏の『奈良歳時記』をベースに、関西の会員から新しく募集する奈良大和の句作品を加えて、一冊にまとめて出版します。なお俳人協会からもすでに『新大和吟行案内』が出ていますが、今回企画の関西現俳協『奈良歳時記』は、俳句と紀行文が一つにまとめられたユニークな歳時記として、連載中から好評を得たものです。刊行は来年の予定。

三、「忘年会&句集祭」十二月十一日(土)開催

間もなく歳末。恒例の「忘年会&句集祭」を開催します。会場は昨年と違い、中之島の「大阪国際会議場」です。多数のご参加をお待ちしています。

(増田 耿子)

2003年決算報告書

・平成15年12月31日現在

期首預金残高(定期預金)	2,300,000	期末預金残高(定期預金)	2,300,000
" (普通預金)	1,288,780	" (普通預金)	1,651,008
手持現金残高	487,403	手持現金残高	362,149
合 計(前期繰越)	(A) 4,076,183	合 計(次期繰越)	(D) 4,313,157

収 入 の 部	金 額	支 出 の 部	費 用
本部助成金(第一次)	2,538,800	総 会 費	1,321,676
本部助成金(第二次)	120,000	忘年会&句集祭	1,027,083
総会懇親会々費収入	568,000	助成金(青年部活動助成など)	0
句集祭懇親会費収入	424,000	会 議 費	294,213
寄 付 金	210,000	旅費・交通費	219,640
		慶 弔 費	18,231
		通 信 費	51,040
		事 務 費	91,189
		役員手当	509,000
		事 業 費	89,800
		吟 行 費	0
預金利息	566	振込手数料	2,520
当 期 収 入 計	(B) 3,861,366	当 期 費 用 計	(C) 3,624,392

2004年度活動計画書

2004年6月5日

収 入	金 額	支 出	費 用
本部助成金(一次1300名分)	2,600,000	総 会 費	1,300,000
新入会員分追加助成金	100,000	忘年会&句集祭	1,000,000
総会懇親会々費収入	600,000	助成金(青年部ほか)	500,000
忘年会&句集祭懇親会費収入	400,000	会 議 費	300,000
事業収入(吟行会参加費等)	600,000	交 通 費	200,000
預金利息	500	印 刷 費	200,000
		慶 弔 費	50,000
		通 信 費	200,000
		事 務 費	100,000
		役員手当	600,000
		事業費(吟行会/出版等)	2,000,000
		振込手数料など	10,000
前期繰越金	4,313,157	小 計	6,460,000
合 計	8,613,657	次 年 度 繰 越 金	2,153,657

* 決算・活動計画書ともに平成16年6月の総会において、承認済。